

博士論文の要約

氏名 田村 美由紀

論文題目 近現代日本文学におけるディスアビリティとジェンダー
——身体・性・書くこと——

全4部9章で構成される本論文は、ディスアビリティとジェンダーという二つの概念を軸とし、両者が交差する場において階層的差異を生み出す力学が複雑化していく様相に目を向ける。とくに「身体」「性」「書くこと」という三つの領域の相関関係に着目し、文学テキストや映画、文化表象の分析を通して、既存の規範的・支配的価値観への対抗的視点を提示することが本論文の目的である。以下、各章の概要を述べる。

第Ⅰ部では、身体の機能的な障害により書くことの困難に直面した書き手、とくに既成の男性作家の経験に焦点を当てる。「第1章 書けない男性作家とアイデンティティの所在——谷崎潤一郎の口述筆記創作をめぐる——」では、谷崎潤一郎の口述筆記創作を事例に取り上げる。書けない男性作家のアイデンティティの所在をめぐる、書く行為を代行した女性筆記者との関係、そしてジェンダーやリテラシーという階層性を生み出す指標がいかんにか利用されているのかを、谷崎や周囲の人々の証言、批評言説、小説テキストを横断的に分析することで明らかにする。「第2章 口述筆記というケア労働——伊吹和子の事例を中心に——」では、口述筆記をケアの営みとして捉えることを通して、主に女性筆記者の視点から、男性作家との交渉の実態を浮かび上がらせることを試みる。谷崎潤一郎の筆記者を務めた伊吹和子の回想記の記述を導きに、彼女がいかなる論理で口述者(谷崎)と対峙し、また口述筆記の現場に生じる搾取や抑圧に対してどのように抵抗していったのかを検証する。また、口述者と筆記者との関係をケアと依存の論脈に配置することで、アイデンティティの承認をめぐる両者の相互応答性を抽出することを目指す。「第3章 他者ととともに書くこと——武田泰淳『目まいのする散歩』——」では、武田泰淳と武田百合子の「異質性」に焦点を当てる。二人は、作家夫婦にしばしば生じる主人と奴隷、あるいは支配と従属の関係とは一線を画す評価を得ており、肯定的な文脈で語られることが多い。本章では、そうした異質さの内実を具体的に解きほぐすため、口述筆記によって執筆された『目まいのする散歩』(1976年)を対象とした考察をおこなう。このテキストに描出された不如意の身体に対する武田泰淳の意識や他者への敏感なまなざしに着目し、それが「する(能動)／される(受動)」という二項対立を超えて、〈他者ととともに書く〉という書く行為の協働性に結びついていることを論じる。

第Ⅱ部では、書く行為の〈主体〉ではなく〈媒体〉となることによって生み出される身

体性の問題を扱う。「第4章 〈^{メディア}媒体〉となる身体——円地文子「二世の縁 拾遺」——」では、男性作家たちが口述筆記という枠組みを物語に取り込む際、女性筆記者をいかに造形し、テキストに配置してきたのかを踏まえたうえで、それらとは異なる筆記者の姿を提示した作品として、円地文子「二世の縁 拾遺」（1957年）を取り上げる。本作における口述筆記は、上田秋成「二世の縁」というプレテキストを作中に引用するための単なる手法ではなく、物語における女性主人公の布置とその変化を照射する装置として機能している。筆記者である「私」の〈媒体〉的役割がもたらす身体感覚の変化を物語の展開に沿って分析することで、本作が女性の性に向けられたまなざしを批判的に捉え返したテキストであることを論証する。「第5章 非懐妊のエクリチュール——多和田葉子「無精卵」——」では、文章の創造的な起源になるという意味での書く行為を称揚し、〈書き写す〉ことを創造性を欠く劣った行為とみなす支配的な価値観について再考するため、〈書き写す〉という行為の模倣性や運動性をラディカルに物語化した多和田葉子「無精卵」（1996年）を分析する。本作は書く行為と生殖を、その創造性においてアナロジーに結ぶ思考枠組みに対して問題提起的なテキストである。創造的な主体になることとは異なるやり方で書くことと交わろうとする書き手の姿を通して、創造性に固執することの窮屈さや不自由さ、異性愛規範の排他性をあぶり出す物語の寓意的な構造を読み解く。

第Ⅲ部では、身体と性の領域におけるディスアビリティの問題を扱う。焦点を当てるのは、男性セクシュアリティの規範と亀裂に関わる〈性的不能〉の表象である。「第6章 〈性的不能〉とメランコリックな欲望——谷崎潤一郎「残虐記」——」では、原爆によって〈性的不能〉に陥った男性が登場する谷崎潤一郎の未完の小説「残虐記」（1958年）を分析対象に取り上げる。本作では一見占領下の日本人男性の心性が典型的に表象されているように見えるが、〈性的不能〉からの回復を志向しない男性主人公のメランコリックな身体に、ジェンダー・アイデンティティの不安定化と異性愛規範が遮ってきた同性への欲望の表出を読み込むことで、〈性的不能〉を意味づける文脈が異性愛主義を前提として構築されていることを明らかにする。「第7章 回帰するトラウマ——新藤兼人『本能』——」で焦点を当てるのは、原爆の後遺症によって〈性的不能〉に陥った男性を描いた新藤兼人監督の映画『本能』（1966年）である。本作は主人公の広島での被爆経験を物語の起点としながらも、1954年に起こったビキニ事件との関連性も示唆されており、核や放射能に対する不安に覆われた時代背景を広く射程におさめている。本章では、これまで性の喪失と回復の道程を描いた物語として評価されてきた本作の解釈を再検討し、被爆体験と男性セクシュアリティの問題が交差する物語構造が、1960年代半ばの時代情勢とどのように切り結んでいるのかについて考察する。

第Ⅳ部では、震災や性暴力といった現代社会においてアクチュアルなテーマを扱った小説テキストの分析を通して、ディスアビリティとジェンダーが交差する場の力学を現代的

な課題として捉えるための糸口を探る。「第 8 章 汚染された身体と抵抗のディスコース——吉村萬壺『ボラード病』——」では、震災後文学のひとつに数えられる吉村萬壺『ボラード病』（2017 年）を取り上げ、病んだ女性の身体に対してどのような意味づけがなされているのかを考察する。人々の生が序列化され、選別される状況と、そうした現実を覆い隠すために理想的な結びつきを装う共同体とのはざまに置かれた語り手の身体描写を手掛かりとしつつ、正常／異常という二項対立の論理を強制する暴力性とそこから脱却する筋道を本作の割り切れない語りから読み取る。「第 9 章 〈傷〉をふさぐ／ひらく想像力——桐野夏生『残虐記』——」では、〈傷〉を抱えた主体と他者との関わりをめぐる問題について桐野夏生『残虐記』（2004 年）を通して考察する。本作の強力な解釈格子として機能してきた想像力という概念について再考し、本作が想像力の有効性を表すと同時に、他者による想像的な所有という不可視の暴力から逃れることの困難さを示すテキストとしても定位しうることを明らかにする。

以上の議論を通し、アイデンティティの内部にはらまれた潜在的な矛盾や齟齬を注視することが、主体の位置を可視化されているカテゴリーだけで即断しないこと、またカテゴリー間の競合の動態から他者との関係性がいかに構築されているのかを検証する視座にも結びつく結論づけた。